

フタ転がし遊びでの

子どもの経験

—子どもの興味の

持続と発展—

転がす遊びが好きな子ども

幼児期の子どもたちが繰り返し遊ぶ遊びの一つに「転がす」遊びがあります。子どもは乳児のころからボールを転がして遊ぶことを好みますが、幼児期になると積み木を組み合わせると傾斜のあるコースを作り、そこでペットボトルのフタやセロハンテープの芯などを転がして楽しむ子が増えます。

また、砂場で雨どいなどに使用

されるヒューム管を使って水を流す遊びもよく見られることを考えると、幼児にとつて傾斜を物体が上から下へと移動する（転がる・流れる）ことは不思議な魅力があるようです。そこで今回は、ある年の年長児のクラスで、ほぼ一年を通して、男の子たちが繰り返し行ったフタを転がす遊び（以下「フタ転がし」）の事例から、フタ転がしの魅力と、それが子どもの育ちとどのように関連しているかをとらえてみたいと思います。

「収集」

—たくさんフタを持つ—

今回紹介するフタ転がしは、一

学期の五月から翌年の三学期の二月までほぼ毎月の観察で見られました。長期間継続するということは、それだけ子どもの興味・関心が持続していることを示しています。図1（次ページ）は、九月と十月の二回の観察で記録したフタ転がしの様子です。この遊びでは、積み木などで作ったコースにフィルムケースやペットボトルのフタを、当時子どもたちの間で流行していた「ミニ四駆」に見立てて転がしていました。

九月の記録で、A君が袋からフタを約五十個も出していますが、この遊びを中心になって繰り返して行っていたA君、S君は「ミニ四

駆」のフタと、それをたくさん所有していること自体に、強いこだわりをもっているようでした。たとえば、この翌週（九月二十四日）の観察では、S君とA君と先生が一緒に、A君のフタを床に十個ずつ並べて数えると、百個以上もありました。また、A君同様にとくさんのフタを持っているS君は、遊んでいる途中でフタが一個なくなっただけでも厳しい表情で探していました。

列車を長くつなげたり、ままたの食べ物をとくさんかばんに詰めたりと、同じ物をありったけ持つことで満足する姿は二〜三歳ころにしばしば見られると指摘され

ていますが（今井^註 一九九一）、A君たちがフタをたくさん持ち遊ぶ姿は、たんに「たくさん持つこと」というだけでなく、切手やシールの収集にも通じる「コレクションとして持つこと」のこだわりを感じさせるものでした。また、S君たちはフタをセロハンテープで貼り合せたり、油性ペンで塗ったりするなどして、転がすフタを工夫して作っていました。

大人から見れば、どれも同じように見えるフタであっても、子どもにとっては一つひとつに個性があり、「どれか一つでもなくなったら困るもの」なのだろうと感じます。

9月17日

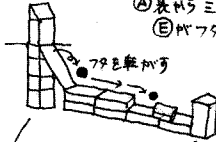
保育室

11:00

①③⑤ 積み木を出してミニ四駆のコースを作り始める

④ 袋からミニ四駆(フィルムケースのフタ)を出す

⑥ 袋のフタを綺麗にしないと、④ 袋からバニーと宝の山を出す



①③⑤ 50個ぐらいあるフタから (フタ50個ぐらい) 「いせーりせー」でフタを選ぶ

①③⑤ 自分のフタをコースに動かす

⑥ コースの端の積み木について「これめめよー」と言うと、⑤「クリアしよう」と言う

④「(積み木を)全部使おう」とほかの積み木も出し始める

④ 袋の積み木を並べると、⑥「は外さないようにしよう」と言う

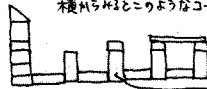
⑤「スペシャルカップ」と何度も言いながらフタを動かす

⑤ コースに積み木を高く積む

横持ちとこのようなコースになる

①「そぞろかー、お片付けよ」

⑤⑥「スペシャルカップ」と言ったら
とんとん積み木を積んでいく



入り口が近くなっては物々しくとんとんコースを積んでいく

⑥「せんせー、ここは北のー」と①に言う

⑤⑥④ コースを作り換える

① 袋

ここをといておいてほしいの貼り紙
A. S. E

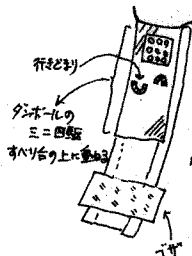
10月15日

園庭

11:00

すハリ台のこころ

①⑦⑧ 袋「マダマダ」とダンボールで作ったミニ四駆コースを
作る



⑤「おれは隊長」

⑦「⑧君と⑦君が、てくわんたんよ」

⑤「④ー、④ー」と砂場にいる④を呼ぶ

⑤「お水にちにもやらしちゃう」とフタをコースで動かす

⑦「かー、⑤君行きてまりも、と作ってます？」

④もやりましたフタを動かす

⑤「全部出すからさー」と次々にフタを動かす

コースの行きどまりが壊れる

⑦「壊れたら、もう一つ作ります？」

▲図1：9月と10月のフタ転がし

「協同」

—大きなコースを作る—

図1の九月の様子に見られるように、フタ転がしのコースは、積み木をたくさん使った高さも幅のあるものが作られていました。九月の時点では、すでに何度も同じようにコースを作ってきた経験があるからか、あまり時間をかけずにコースを完成させていた記憶があります。興味や関心が継続し、同じ遊びを繰り返す中で、どのようにすれば傾斜を作ることができかなど、物を自分なりに使いこなすことができるようになっていきます。また、図1の中で、A君

がコースにさらに積み木を加え始めた時に、E君が「はみ出さないようにしてよ」と伝えているように、同じ遊びを楽しむ仲間同士の間で、イメージやアイデアを言葉で伝え合っていく姿も見られます。五歳児の後半の育ちの姿として重視されている「協同」的な活動では、子どもたちが共通のめあてをもつて試行錯誤して物を作ったり、考えを言葉で伝えあったりすることを経験します。フタ転がし遊びの繰り返しの中で、A君たちは自然な形で物や人とのかわりを深めています。子どもの興味・関心に沿って活動が展開し、その継続として一つの遊びが繰り返

返し行われていくことの意義を感じます。

また、九月の事例でE君が「せんせー、こことつといてー」と言つて、先生に「ここをとつておいてください」と書いた紙を貼ってもらいコースを残してもらっているように、大きな場を作つて楽しむ遊びでは、作つた場を片付けずに取つておいて、次の日も楽しむことがあります。場を取つておくかどうかは、保育室の環境やほかの子の遊びとの兼ね合い（ほかに積み木を使いたい子がいないか）などを考慮して先生が判断することになりますが、この事例のように場を取つておくことで、遊

びが積み重ねられると共に、ほかの子にもS君たちのこだわりや楽しみが伝わる機会にもなったのではないでしようか。

「発展」

—コースを変化させる—

「フタ転がし」という同じ遊びを繰り返しているようでも、その中で、さまざまな発展が見られます。図1の十月十五日の事例では、長い段ボールの上に梱包用（緩衝材としてぶちぶちした突起のある）ビニールや行き止まりなどをつけたコースをY君やR君が作り、園庭のすべり台の上に取りつけています。そこにS君やA君

もやってきてフタを転がしています。また、この同じ日の観察記録では、保育室に積み木で作ったコースもありつつ、S君たちは園庭のすべり台にゴザや梱包用のビニールを取りつけてコースを作る姿も見られました。

このように、場を変えたり工夫を加えたりして、遊びを発展させていくことは、さまざまな物を自分なりに工夫して組み合わせる点で、物とのかかわりが深まっていることを示しています。また、主にS君たちが行っていたフタ転がしのおもしろさがほかの子ども（Y君たち）にも伝わっていることは、他者の存在が遊びを刺激し

ていることがわかります。物とのかかわりと人とのかわりの結びつく時、遊びがより発展していくといえます。

また、習志野市の新栄幼稚園の実践研究（二〇〇六）では、五歳児が小型積み木のコースにビー玉を転がす「コロコロゲーム」遊びの広がりや深まりを考察しています。その考察から、子どもたちが遊びの中で「的を倒したい」「遠くまで玉を転がしたい」「玉キャッチゲームにお客に来てほしい」などのめあてをもち楽しさを追求する中で、的の並べ方を工夫したり、コースを難しくしたり、遊びのルールを考えたりするとい

う遊びの広がりや深まりが指摘されています。これらの経験から子どもが、コースの角度(斜度)、ビー玉の速度、ゲームの順番や回数などの数・量・形の感覚を豊かにすることも指摘されています。

この「コロコロゲーム」の全体考察で「この遊びを通しての満足感が、『今度は違う遊びでも楽しめ方を考えてみよう』という意欲づけに結びつき、次の遊びにつながるがっていくと思われる」と述べられているように、一つの遊びを「遊び込む」ことで、次の遊びにもつながっていくという視点が保育の中で遊びを見る際に重要であると感じます。

「偶然」

―子どものコースの作り方―

図1のコースを見ると、積み木を高く積んだり、梱包用ビニールを貼ったりと、より難度の高いコースを作ろうとしています。同じことを繰り返しているように、もつとおもしろくなるように子ども自身で工夫していることがわかります。そしてその作り方は、フタがどう転がるかというはつきりとした見通しをもつて作っているというよりも、まずは思うままに作ってみてフタを転がし、その転がり方を楽しむというものです。結果が予想されてしま

うのではなく、偶然によって結果が左右される点にフタ転がしが何度も繰り返される理由があるのかもしれません。その意味で、フタ転がし遊びは、予測と偶然の絶妙なバランスを子ども自身で生み出す遊びであるともいえます。

(千葉大学教育学部准教授)

1 注

1 今井和子(一九九一)「探索からごっこへ 目に見えない心のうちを見るものに表していく過程」『発達』No.46 Vol.12(18~25頁)

2

習志野市立新栄幼稚園「平成一八年度研究のあゆみ 幼児期にふさわしい知的発達を促す保育のあり方」おもしろい・やってみたいという気持ちを育む環境の工夫(数・量・形を通して)「

*この連載は今回で終了いたします。